

長谷川 望牧師

* 過越の祭りに来ていた何人かのギリシア人がイエスに関心を持ち、ぜひ会いたい、弟子のピリポのところに行き、アンデレとともにイエスに伝えた。福音伝道はイエスを知らない人をイエスのところに連れて行くことから始まる。

* イエスはそれらのギリシア人や弟子たちも含めて、そこにいた群衆にいよいよ公言される。「すると、イエスは彼らに答えられた。「人の子が栄光を受ける時が来ました。まことに、まことに、あなたがたに言います。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。」(ヨハネ 12 : 23 ~ 24) イエスは、まもなく十字架で死ぬことと、その意味と目的の比喩である。すなわち、イエスは私たち一人一人の罪を背負って身代わりの死を遂げられること、それによって信じる者の罪が赦されるという真理である。また、朽ちない体によみがえるためにも死はどうしても経験しなければならないことであった。イエスが死ぬことによって私たちが生きることができるのである。

* 「自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世で自分のいのちを憎む者は、それを保って永遠のいのちに至ります。」(12 : 25) 一粒の麦の真理は私たちクリスチャンにもあてはまる。いのちは神様から与えられた尊いものであるから大切にしなければならない。しかし、「自分のいのちを愛する」とは、この世において自分の欲を満たしたり、自分の栄光を求めたりすること、いわば自分中心の生き方をすることである。「自分のいのちを憎む」とはその自分中心の生き方を憎むほどに拒否する生き方のことを言われている。それは、神のために、イエス・キリストを中心に置いた生き方のことである。そうすれば「永遠のいのち」が約束される。

* 「わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいるところに、わたしに仕える者もいることとなります。わたしに仕えるなら、父はその人を重んじてくださいます。」(12 : 26)

日常の具体的な生き方は「イエスに仕える」ことである。仕えるためには、行いが必要である。それは、神様のため、教会のため、人のために心に向け、時間を費やし、財を費やし、賜物を費やすことである。それらの何もないという人でも「祈り」だけはできる。いや、祈りこそがイエス・キリストに仕える最高の行いである。